

わたず

ニュース

ITAMISHI KONCHUKAN NEWS

第12号 2009 / 2

特集 昆虫館で収蔵している「モノ」



伊丹市昆虫館

ほっとパーク昆陽池

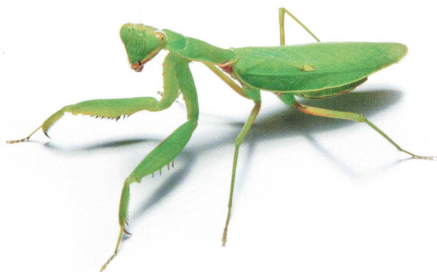
昆陽池公園のカマキリと卵のう

現在、カマキリの仲間は日本で11種確認され、そのうち4種を昆陽池公園で観察することができます。夏の間、大きな複眼であたりを見回し、鎌（かま）のような前脚で他の昆虫たちを捕まえ食べていたカマキリたちも、冬の訪れと共に卵がたくさん入った卵のうを産んでその生涯を終えます。カマキリの卵のうは、種類によってそれぞれ大きさや形が違い、慣れると簡単に見分けることができます。狩りをする時の素早い動きや、どことなくユーモラスな威嚇（いかく）のポーズ、お尻から出てくるハリガネムシなど、カマキリの観察にはとても魅力があります。来シーズンは、どんなカマキリに出会えるのかな？と考えながら、卵のうさがしをするのはとても楽しいですよ。（野本康太）

■ハラビロカマキリ

Hierodula patellifera (オス：45-64mm メス：53-64mm)

名前の通りお腹の横幅が広いカマキリです。草むらでも見かけますが林の縁などの樹上で暮らし、8月から10月くらいに成虫を見かけます。威嚇のポーズをすると前脚の内側にある黄色いイボ状の突起が目立ちます。

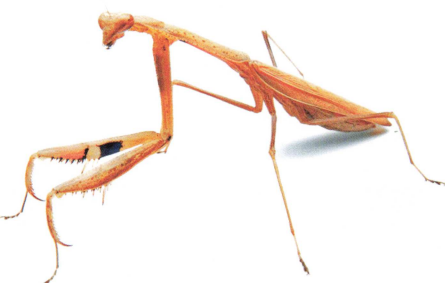


ハラビロカマキリの卵のう：
木の幹や枝によく見られる。

■コカマキリ

Statilia maculata (オス：36-55mm メス：46-63mm)

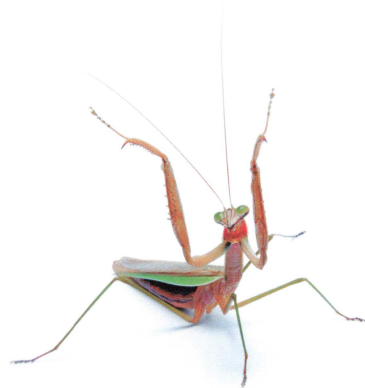
昆陽池のカマキリの中では最も小型のカマキリです。褐色の体のものが多く、前脚の内側に見られる黒と白の模様が特徴です。昆陽池では9月から11月前半くらいに成虫を見かけます。



コカマキリの卵のう：
枯れ草、木の根元、石やブロック塀の表面などに見られる。

■オオカマキリ

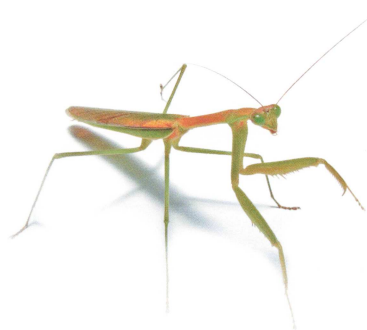
Tenodera aridifolia (オス：68-90mm メス：75-95mm)



オオカマキリの卵のう：
枯れ草の茎によく見られる。

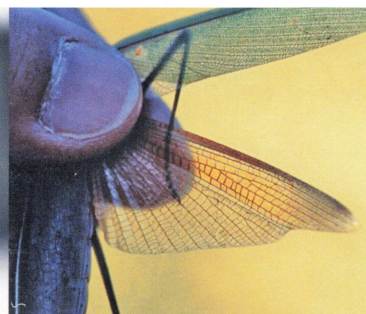
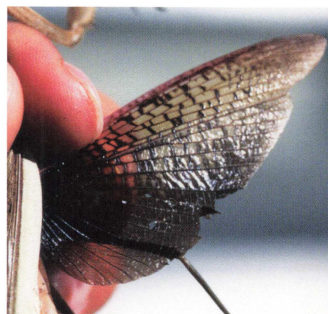
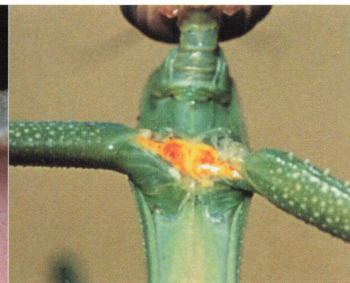
■チョウセンカマキリ

Tenodera angustipennis (オス：65-90mm メス：70-90mm)



チョウセンカマキリの卵のう：
枯れ草の茎、ヤナギなどの枝によく見られる。

どちらも大型の種類で公園や河川敷などの草むらで見られ、9月から11月後半くらいまで成虫を見かけます。外見がよく似ていますが前脚のつけ根の色と後ばねの色で見分けます。



胸の色と後ばね：オオカマキリ（写真左）は胸が黄色で後ばねが濃い褐色。チョウセンカマキリ（写真右）は胸がオレンジ色で後ばねが薄い褐色。

むしムシ虫眼鏡

Vol.12 ウラギンシジミ

ウラギンシジミの幼虫は刺激を受けると、2本の突起の先からブラシのようなものをだします。それはまるで線香花火のように一瞬です。さらにこの突起があるのはおしりの方（第8腹節）なのです。フジやクズなどのマメ科の植物を食草としていて、つぼみ、花、実、新芽などを食べています。体の色も食べ物の色に似せて、緑～赤紫などいろいろです。食痕などを手がかりにじっくり探さないとなかなか見つかることができません。一方、成虫はその名のとおり銀色に輝く白い翅がよく目立ちます。しかしそれは翅の裏側で、表側はおスとメスでちがいます。成虫で冬越しをするため、寒い真冬はじっと葉の裏にとまるウラギンシジミを見つけることができるかもしれません。

（角正美雪）



オスとメス



ブラシをだした瞬間の幼虫

<ウラギンシジミ>

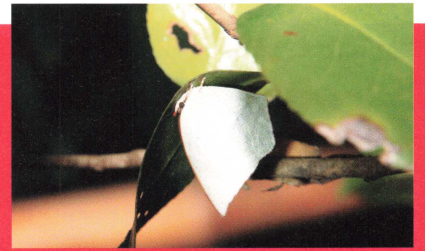
学名： *Curetis acuta*

分類：チョウ目シジミチョウ科

体長：開張38～40mm

分布：本州、四国、九州、南西諸島

冬越しするウラギンシジミ
(2008年12月30日 昆陽池公園)



亜熱帯の温室から

Vol.12 サガリバナ

沖縄の海岸には、海流に乗って多くの植物の種が漂着します。その中に、平たい卵形で繊維質に覆われた物体が見つかります。調べてみるとサガリバナの果実でした。2年前に高さ2mほどの株を入手し、チョウ温室内の水路に配置しました。開花まで数年かかると予想されましたが、昨年の7月下旬から開花が始まり、剪定をした11月下旬まで咲き続けました。夜に咲き朝には散ってしまうこの花は、蜜の量が多く、夜行性のコウモリによって受粉されると言われています。このため、チョウの蜜源にはならず、種も付けることができないと思っていました。

ところが、最初は朝には散りきっていた花が、夏過ぎからは昼間も残るようになり、オオゴマダラの訪花も確認できました。数個の結実も見られ、少しずつ種が大きくなってゆく様子が観察できます。熟した果実が川に落ち、漂流する姿を見届けたいものです。

（後北峰之）

<サガリバナ>

学名： *Barringtonia racemosa*

分類：サガリバナ科



収集・保存の役割

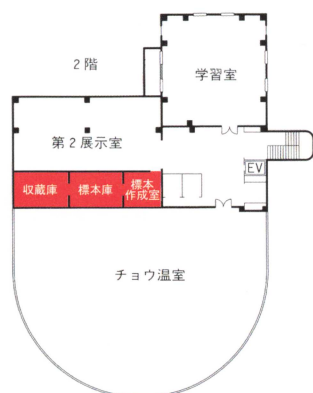
博物館は、「収集・保存」「調査・研究」「展示・教育」を基本活動とした、社会教育の機関です。つまり収集・保存した資料と、それらを調査研究して得た成果を展示することが、利用者に対する博物館の役割です。「収集・保存」という活動は、博物館が持つ重要な使命のひとつです。

資料の収集は、それぞれの博物館が持つ基本的な目的や方針に沿って行われ、その方法は採集、購入、交換、寄贈、借用、製作と様々です。

博物館の「モノ」は、ただの物体ではありません。学芸員によって選ばれた、「情報」をもった「モノ」が、博物館の「資料」として収蔵されるのです。博物館はモノを集めると同時に「情報」を集めているといってもよいでしょう。だからこそ、「古くなったから入れ替える」ではなく「きちんと集め、保存する」のが博物館として大切な活動となるのです。今回の特集は、収蔵スペースとそこにある「モノ」の資料について紹介します。

伊丹市昆虫館の収蔵スペース

収蔵スペースは2階にある第2展示室に沿うように3室あります。一番手前は「標本作成室」で、主に昆虫標本を作成する作業部屋です。同時に収蔵スペースの前室として、外との温湿度差を和らげる緩衝空間としての役割もあります。ここには様々な標本作成道具があり、保存用の標本箱やサンプルビンのストック、顕微鏡なども管理しています。中央の部屋は「標本庫」といい、移動式標本棚に日本産の昆虫類を目ごとに分類して収蔵しています。ほかに授業教材用の標本も管理しています。また学芸スタッフの個人棚もあり日々の調査研究に活用しています。一番奥の「収蔵庫」は、特に重要な資料を保管するための部屋です。外国の昆虫標本、寄贈コレクション、調査や展示など目的ごとに作成された、昆虫標本や動物の剥製・骨格標本などを収蔵しています。「標本庫」と「収蔵庫」が資料の収蔵スペースで、そこにある資料については、後の段落で紹介します。



収蔵スペースの図面



標本作成室のようす



標本庫の移動式標本棚



収蔵庫のようす

資料の保存について

保存のためには、劣化を防ぐための収蔵環境を保つことが重要です。特に気をつけなければならないのはカビ、光による褪色（たいしょく）、昆虫による食害です。当館の収蔵スペースは、来館者でにぎわう第2展示室と湿度の高いチョウ温室に挟まれた場所であるため、温度と湿度の変化には細心の注意を払っています。収蔵環境はカビの発生を抑えるため気温20℃、湿度50～60%を保つよう、エアコンや除湿器、時には加湿器などを使うことさえあります。人の出入りに伴うホコリや泥も、カビなどの原因です。これらを持ち込まないよう、室内は土足禁止です。光による褪色は主に紫外線によりますが、これらの部屋には窓がなく太陽光は入りません。室内の蛍光灯も極力つけたままにせず、作業は標本作成室で行うなどを心がけています。

資料を食害するヒョウホムシやカツオブシムシ、ゴキブリなどの侵入はとてもやっかいです。生きた昆虫を飼育・展示している当館では、燻蒸剤（殺虫成分を含んだガスを発生させる薬剤）を使った部屋全体の消毒ができません。まして壁一枚へだてた隣はチョウ温室です。したがって対策は害虫が侵入しないように「防除」が中心となります。新たに収蔵する標本は、基本的にあらかじめ外部で殺虫処理をします。また床続きの展示室からの侵入を防ぐために粘着トラップなどを設置しています。室内では標本箱や収納ケースごとに防虫剤を使っています。

また収蔵スペースは普段は施錠してスタッフのみが出入りし、警備システムや水を使わない特殊な消火設備で管理しています。



温度と湿度を記録しています



室内は土足禁止、スリッパにはきかえて入室する

持っている「モノ」

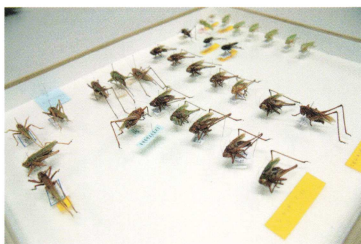
収蔵している資料

伊丹市昆虫館ではさまざまな資料を保存しています。昆虫標本の他にも昆虫にかかわる民俗資料、写真のポジフィルム、古書、昆虫以外の動植物の剥製や標本、および学芸スタッフ個々の調査資料などを保存しています。収蔵資料は展示するだけでなく、調査・研究活動における重要な学術資料として収集・保存しています。ここでは当館の収蔵資料の特色を種類別に紹介します。

昆虫標本

収蔵資料の数量で一番多いのが昆虫標本です。現在およそ65,000点以上の標本を収蔵しています。個々の標本は分類群（よく似た仲間）ごとに分類してガラスふたのついた標本箱に納めています（例：オンブバッタはバッタ目バッタ科の箱へ、モンシロチョウはチョウ目シロチョウ科の箱へ保存）。国内外問わず、あらゆる昆虫標本を収集していますが、現在特に力を入れて集めているのは「伊丹市内やその周辺にすむ身近な昆虫」です。とくに市内の昆虫については日頃の調査活動で採集し、作製した標本を基に種のリスト（目録）を作成し、身近な地域にどれだけの昆虫が住んでいるのかを明らかにしたいと考えています。

他に、北村四郎氏の世界中のチョウ類コレクション（1998～2001年寄贈、10,006点）、野村全氏による国内産中心のクワガタ目コレクション（2002年寄贈、約21,630点）など、個人の方から寄贈を受けたコレクションもあります。



バッタ目キリギリス科の標本箱

昆虫民具

昆虫と人のかかわりを示す民俗資料も収集・保存しています。代表的なものとしては食用昆虫の標本とそれに関わる資料（2007年梅谷献二氏寄贈、95点・2007年野中健一氏寄贈、367点）、中国のコオロギ相撲用具等（1994年田中梓氏寄贈ほか、20点）、薬用昆虫（19点）などです。



コオロギ相撲用具等

写真のポジフィルム

デジタルカメラが主流となる以前は写真をフィルムカメラで撮影していました。ポジフィルムで撮影された精細な昆虫写真は、標本と同じくらいの学術的価値があり、また日頃の活動や風景を撮影した記録写真は昆虫館の歴史を物語る貴重な資料です。収蔵している約8,500

枚のポジフィルムは湿気や光を嫌うため、標本庫内にある専用の保管庫に入れられています。撮影データはパソコンに入力され、データベースになっているのでいつでも必要な写真を検索して使用することができます。



写真のポジフィルム

これからの課題

展示されている資料は、収蔵資料の一部にすぎません。うらがわに保存されている資料が活用されるためには、それらを必要とする利用者に公開できなければなりません。当館では整理、分類作業を徐々に進めていますが、登録などのデータベース化が今後取り組むべき大きな課題です。また、増え続ける資料の収蔵スペースの確保は、どこの博物館もが抱える問題です。来館者の目には触れない収蔵資料が情報として公開され、「開かれた博物館」となるよう取り組んでいきます。

（角正美雪・長島聖大）

伊丹市昆虫館の特色ある収蔵資料の例



動物の剥製・骨格標本



昆虫のうんこ標本



昆虫の脱皮殻標本



食用昆虫資料

「さいきんの

年末年始の昆虫館

昆虫館は毎年、12月29～31日に休館しています。この間、館内では清掃や設備のメンテナンスを行ったり、手作りの門松や年明けにスタートする「チョウ温室のラン」展示の準備などで大忙しです。

一方、お正月は元旦からオープンします。飼育昆虫の世話は一日も休むことができません、スタッフは交替で365日出勤しているため、開館することができるのです。元旦から3日までは来館者全員に「新春ちょうちょおみくじ」をひいていただき、大吉の出方には特製バッジをプレゼントする恒例イベントをおこなっています。（長島聖大）

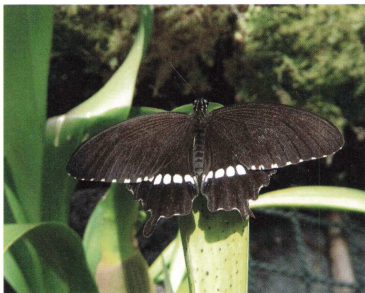


手作りの門松



大吉おみくじでもらえる
「お正月特製バッジ」(2009年正月版)

シロオビアゲハとリュウキュウムラサキの展示終了

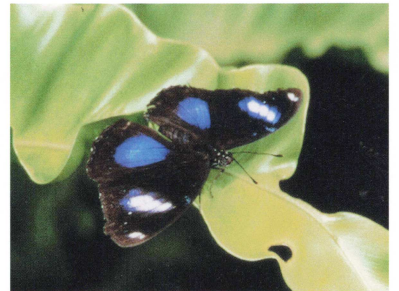


シロオビアゲハ

開館当初からチョウ温室にて生態展示してきたシロオビアゲハとリュウキュウムラサキの飼育展示を、2008年末で終了しました。チョウ温室の中で、伊丹近辺にくらす身近なチョウの割合を増やそうとしていること、飼育技術が向上して身近なチョウであるナミアゲハやクロアゲハ、ナガサキアゲハなどを1年中飼育展示できるようになったことが理由です。また、伊丹市昆虫館ではチョウが温室から逃げ出さないよ

う細心の注意を払っていますが、可能性はゼロではありません。もし屋外へ出た場合、シロオビアゲハとリュウキュウムラサキは周辺環境に幼虫が育つ植物が存在するため定着の危険があり、それを避ける理由もあります。現在はアサギマダラやアオスジアゲハなど伊丹でも観察できるチョウの飼育・展示に挑戦し、種類や数はこれまでと同様に保つようにしていきます。

（角正美雪・坂本昇）



リュウキュウムラサキ

カエンボク開花間近

6年ほど前の11月下旬、園芸店の温室で真っ赤な花を咲かせているカエンボク「火炎木」を見ました。舐めさせてもらった蜜は豊富で甘く、鳥やコウモリによって花粉が運ばれるという解説がうなずけました。

チョウ温室内でも咲かせたいと思い、高さ2.5mくらいのカエンボクを入手し、植え付けました。熱帯アフリカ原産で暑さが大好きなこの花を国内で咲かせるためには、寒さが訪れるぎりぎりまで野外で管理し、霜が降りる直前に温室に入れると花芽をつけるとのことでした。ここ数年は光熱費の節減という意味合いもあり、できるだけ温室のボイラーの始動を遅らせていました。

現地では20mを越す大木になるというこの植物の成長は速く、植え付けから3年目で8mを越す高さとなりました。12月上旬、伸びすぎた枝を剪定する相談をしていたところ、枝先に周りの葉とは違う形の芽が見つかりました。どうやら花芽のようです。剪定は急きょ中止し、翌日から順調に大きくなっていく蕾（つぼみ）を観察することができました。1月10日現在、まだ花は咲いていませんが、この号が出る頃

にはきっと燃えるような花弁を見せていることでしょう。豊富な蜜を出すこの花を、どのチョウが発見し利用するのか楽しみです。

（後北峰之）



開花間近のカエンボクのつぼみ

飼育室から

かんさい自然フェスタ2008に出展しました



伊丹市昆虫館友の会の出展ブースの様子

2008年11月15、16日に大阪市立自然史博物館でおこなわれた、かんさい自然フェスタに出展してきました。これは大阪市立自然史博物館と関西自然保護機構などが主催した自然環境の保全・保護をテーマにしたお祭りです。

50を超える市民自然団体、博物館、企業などによる出展のほか、学会のようなポスターセッションやシンポジウムも開催されました。内容は堅苦しいものではなく、こどもも大人もワイワイと楽しめるイベントです。「関西文化の日」で博物館は無料だったこともあり、2日あわせて1万人を超える人々ににぎわいました。昆虫館からは昨年度の「昆虫食展」のポスター展示を、友の会は虫とのふれあいやオリジナルグッズのブースを出展しました。特に館から持ち込んだ生きた昆虫たちが大人気で、多くの方が虫とふれあいました。このようなイベントは、昆虫館から離れた場所で活動のPRが出来るだけでなく、出展する多くの団体や博物館の方々との交流が大きな魅力です。訪れて下さったみなさま、ありがとうございました。（坂本昇）



大人気だった虫とのふれあい

プチ展示「昆虫白バック写真展」

昆虫の生き生きとした姿を、まるごと封じ込めたような写真を撮りたい。そう考え、いろいろ試してたどり着いたのは、生きた昆虫を白い背景（バック）の上で撮影するという方法でした。しかし標本とは違い、モデルが動くわ、跳ねるわ、飛んで逃げるわ、咬むわ、刺そうとするヤツまでいて、撮影はむちゃくちゃ大変でした。この苦労の結晶の中から53点（昆虫以外も含む）を選び、Tシャツに印刷して展示

したものが、昆虫白バック写真展（会期：2008年11月26日～2009年1月19日）です。学習室での小さな展示ですが、カブトムシやオオムラサキなどの人気のある昆虫だけでなく、クロゴキブリやヒロヘリアオイラガ（幼虫）、ベッコウガガンボなど、昆虫館でしかあり得ないレアなデザインのTシャツが並ぶ様子は壮観で、期間・数量限定でのTシャツ販売も大好評でした。（奥山清市）



昆虫白バック写真展



一番人気だったミカドアゲハ（幼虫）

リーフレットが新しくなりました!

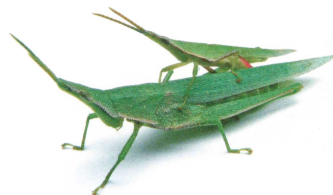
館内のフロアや展示昆虫の紹介、利用できるサービスなどの情報を充実させるとともに、当館のコンセプトや取り組みを発信することを目指してつくりました。

来館された人はじっくりとリーフレットを見ながら見学してもらえ、また手に取られた方が行きたくなるような、そんなリーフレットになればと2008年10月にリニューアルしました。(角正美雪)



新作映像ソフト上映中!

昆虫館映像ホールでは様々な昆虫の映画が上映されています。本年1月1日よりオリジナルソフト「むしさんこんにちは」「虫のだっぴ」の2本が新たに上映スケジュールに組み込まれました。身近な虫の見つけ方や触り方に着目した「むしさんこんにちは」、様々な昆虫が脱皮する瞬間をとらえた「虫のだっぴ」どちらも現在土日限定1日1回の上映です。上映時間についてはお問い合わせください。是非ご覧ください。(野本康太)



両方のソフトに登場するオニバタ

2009年度友の会会員募集中

伊丹市昆虫館友の会は、昆虫館を利用して自然と親しみ、学ぼうとする人たちの集まりです。観察会や調査会、ハイキングなど会員だけの行事のほか、年2回の「友の会ニュース」と「いたこんニュース」の送付、ミュージアムショップで昆虫採集・標本作製道具1割引などの特典があります。

友の会の年度は1月から12月まで。年度途中からの入会も受けけます。

会員になって、仲間と出会い、虫や自然と親しくなりませんか? 詳しくは、昆虫館までお問い合わせ下さい。(坂本昇)

大人会員 (大学生以上の個人)	1,000円
子ども会員 (小学生～高校生までの個人)	500円
家族会員 (同一所帯の大人・子ども合わせて3人まで。超える場合は1人につき500円/人加算)	1,500円

もよおしあない

2月

7日(土) チョウ温室ガイド
8日(日) 虫のおりがみワークショップ 予約制
21日(土) ふれあい体験「むしさんこんにちは」
22日(日) チョウ温室ガイド

3月

7日(土) ふれあい体験「むしさんこんにちは」
8日(日) 虫のおりがみワークショップ 予約制
22日(日) うらがわ探検

4月

5日(日) ふれあい体験「むしさんこんにちは」
12日(日) 虫のおりがみワークショップ 予約制
19日(日) 春の原っぱにでかけよう! 予約制

5月

9日(土) ヤママユ飼育講習会
(2回連続講座①飼い方) 予約制
10日(日) ミツバチ観察会
(3回連続講座①花粉団子) 予約制
10日(日) 虫のおりがみワークショップ 予約制

6月

6日(土) ミツバチ観察会
(3回連続講座②はちみつ) 予約制
7日(日) アゲハチョウをそだてよう! 予約制
14日(日) はちみつカフェ

7月

18日(土) セミの羽化観察会 予約制
25日(土) 昆虫標本の作り方講座 予約制

特別展

7/15～8/31 ギタイ～むしの忍者大集合～(仮称)

企画展

1/28～3/16 虫のかくれんぼ

プチ展示

1/21～3/2 はやにえ
2/4～3/16 虫の死

学習参考展

3/18～7/6 ちょうのくらし2

講習会・観察会の申込方法<詳しい内容は...> 申し込むには...

- ・伊丹市内に在住の方
「広報伊丹」をごらんください。
- ・伊丹市外に在住の方
電話でお問い合わせください。
「広報伊丹」は伊丹市のホームページからごらんになります。
- (講習会・観察会の実施日の
約1ヶ月～2週間前までにお問い合わせください)。
※広報伊丹は実施日の約1ヶ月前に掲載します。
電話でのお問い合わせは掲載以降に案内いたします。
- ・往復ハガキ、FAX、Eメール(携帯電話不可)でおこなえます(締切日必着)。行事の名前、参加する全ての方のEメールアドレスなど記入し、受付期間内にお送り下さい。
- ・申込多数の場合は抽選になります。
- ・往復ハガキの宛先住所
〒664-0015 伊丹市昆陽池3-1 伊丹市昆虫館
- ・FAXの宛先番号 072-785-2306
- ・Eメールの宛先アドレス ge7n-skmt@asahi-net.or.jp

〒	参加希望の講座名
返信	参加希望者全員の ふりがな 名前・学年(年齢)
あなたの住所 氏名	住所
	電話番号
(往復ハガキでの申し込み・表)	

〒664-0015	伊丹市昆虫館 3-1
返信	伊丹市昆虫館
行	何もしないで ください
(往復ハガキでの申し込み・裏)	

編集スタッフより

- ・今回の特集はなかなか入れない収蔵スペースの話です。貴重な情報が満載です! (奥山)
- ・カメムシの研究でヨーロッパへ修行の旅に行ってきました。海外の博物館のスケールの大きさと研究者のレベルの高さにびっくり! 世界は広い。(長島)

次回(第13号)発行は、2009(平成21)年7月ごろの予定です。

表紙写真: 標本庫内の移動式標本棚 撮影: 長島聖大

いたこんニュース 第12号 Vol.6 No.2 (通巻12号)
2009(平成21)年2月発行
発行 伊丹市昆虫館
〒664-0015 伊丹市昆陽池3-1 昆陽池公園内
TEL: 072-785-3582 FAX: 072-785-2306
URL: http://www.itakon.com/
E-mail: ge7n-skmt@asahi-net.or.jp

編集 奥山清市・長島聖大
デザイン原案 pico*picture
印刷 商工印刷株式会社